

大久保武藏鑑

たア其お驚きは御道理では御座い升が先日旦那様が江戸表へ入しつて光月院は後家を立つてゐる出でなるとは言條何うも可笑ひと江戸へ往つて見ると光月院様と重三郎様と噂に違わす深い情交に成つて居ると見へて近頃は石見守と云ふ事に成つて御願養子に成りまして夫れに就て先立つて内の旦那様が御前へ出て重三郎様光月院様の前で何か仰せられたが有るさうで仔細の事は存じませんけれども處が御前から御歸りに成つて又八今日は御前へ出て憎まれ役に成つて来たが世の中油断が成らん殊に由ると無事に乃公の思ふ通りに成れば宜いが大公儀へでも持出して此の御裁許を仰がんければ成るまいと仰せられて御休みに成りましたが其の夜斯くし云々の理由で何んと云ふ者が覆面で包んで居りましたが旦那様も斯知れませんが儲か人は三人と存じて居りましたが旦那様と斯

大久保武藏鑑

う云ふ事をいはれまして御座い升其時彼等の云ふに只角之進を殺したばかりでは不可ない是れから房州へ乗込んで御新造様や甚十郎様を殺して仕舞わねば成らんとモ一既に私より先に江戸を立出をいたしましたろう就ては少しも早く御立退きに成りませんければ不可ませんと聞いて驚いたるおふじ殿は「ふじ」扱ては今夜の夢も正夢でありしかチエ一殘念な事をいたしました。今更夢と又八の話しと相合しまする故盡く驚きました位い、なれども物に騒がぬ御氣象で御座いますから「ふじ」又八然ふ云ふとなら此所を立退せう。又「ヘエーモ」斯ふ爲て居り升には何れ五人や八人は参りませう御國表とて油断は成りません何時何んな者が事をするかも知れません「ふじ」ア、一道理々々……。菊野は只日、と斗りに泣伏して居り升位い、尤もお友お松には内々で其所で俄かに仕度をしまして乳母



大久保武藏證

の松へは相當の金子を遣わし着古したが是れを云ふて自分等の品物を下女とお松の兩人に割符をして遣わし俄かに暇が出ましたから松お松の兩人は其儘にして様々の物を買ひまして夫れハ身輕き奉公をして居る者は氣散じのもので退散をいたしましたした残りもいたしましたる鎌刀、入は御新造を勢わり菊野を勢わり甚十郎を自分で勢わり、背負ひましたる事で御座いまして泣く泣くも住馴れましたる房州の北條を跡にいたしまして其夜の明けおいに内にて遂々透轉をいたしましたのは是れは好い所へ心注ぎました、なれども藤に於ても女丈夫と申し升る位いの者で御座い升から兼て角之進より閉いて居ります証據物だけは奪われはいたしません、矢代越中守より菊野へ下し置かれまして証據物は是れだけの者の自分では是れを預かりました物と見へて一時住馴れたる房州を跡あして一度船で江

大久保武藏證

戸表へ参りました是れから先は何も艱難をしなければ成らん一人殖へれば一人だけ苦勞を増すばかりであり升から菊野に暇を遣わして相當の金子を興へて實家へ歸し、青雲の時を期して親許へ歸した尤も是れも極く秘密であります、却説又八の御新造に向つて、又御新造様私の考へでは此江戸へ参つても矢代の屋敷の近所には居られませぬ小生の在所は外日も申上げました通り大森在で御座いまして、前回大磯在とせしは速記者の誤り、鎌田村と申しますのが拙者の在所、親父は百姓の清兵衛、未だ母も存生親父も存生で居りまして家出をいたしましたし、たから拙者も七年、我家の様子を其後尋ねもいたしません、此所へ参りまして暫く御隠し申うす心得で御不自由では御座い升が……ふじ、又八好いやうに其所は和前に頼む、又へ承知いたしました是れからおふじ甚十郎の兩人を連れまして



大久保武藏藏證

事で鎌田村へ参りました、切て七年も便りをしさい所へ来るの  
でげすから又八も餘まり今歸つたど威張つて歸る理由にも行  
かづ村の入口へ参りましたして一軒の茶見世があるから此所へ参  
つて 又御免なさいヨ 爺い入つしやいまし此方へ御掛けな  
さい 又「爺いさんお茶ア進げてお呉んなせへ、私は茶は飯まね  
へから湯を一杯お呉れ 爺い」 又「お爺いさん何かへ此  
鎌田村の清兵衛へ人は未だ達者で居るさるか 爺い何ん  
で御座い升か西方の…… 又ア、ソレ西方の清兵衛…… 爺  
ハア御達者と申上げたら御座い升が清兵衛とんは私共の將共  
仲間でげてして極く深く交際つて居ますかモ一ハア三年此方腰  
が振けて居るさる 又エ、腰が振けて居るへ 爺い…… 爺  
の毒なのは内儀さんで清兵衛とんの藥の世話から生活向きか  
ら野良仕事、百姓業をして居るさる、確か惣領が一人あつたで、私

大久保武藏藏證

は久して逢はねへから今戻つた所が分るめへと思ふが又八も  
云ふのがあつた、是れがモ一七八年前に家を飛出して屋敷奉公  
をして居ると云ふ事だが江戸も何所の屋敷だか分らうモ一七  
年も便りが無へから死んだものか存命なものだか分らねへ其  
又八の妹にお直と云ふのがあつて是れが十四に成るが中々の  
孝行者阿母と一緒になつて一生懸命に野良仕事をしたり村の  
使ひ早間をして親を祈けて居る 又「然ふかい 爺夫れに一番  
未の子供に金松と云ふ子供がある。又八は是れを聞いたが 又ハ  
ア金松と云ふ子供は無かつたが…… アー、乃公が家を飛  
出してモ一七年目其跡で出来た子供だぞと思つて 又「夫れは  
男か女かい 爺金松と云ふのが男だ、今年六ッに成る其六ッ  
に成る弟を勢つたり村の評判者の娘だ 又「然ふかい…… ア、  
一済まねへ事をした 爺だから今の所じやア清兵衛とんも噓



大久保武蔵燈

ふや喰はづ病氣とは云ひながら實に氣の毒おことと夫れに就  
けても物領野郎が存命て居るなら切望して遣らなければ成ら  
ねんだ何所に居やアがるか和郎さんの前だけれせも親を樂て  
出掛けるとのには不實千萬を奴た傍で聞いて居りましたおふ  
じがふじ又八く和郎マア然んな事を云われて……又誠  
に何うも唯今に成りましては何んど云はれても詮方が御座い  
ません不實と云ふのでは御座いませんが飛んだ事に成りまし  
た親父が煩らつて居り升とい些つとも存じませんで……マア  
御待ちあさいましヨ那方へ参りましたのは次第に由りますと  
私の母かど存じ升。何んせへ年を老つて居りまして大分んに變  
りまして御座い升。と話しをして居る處へ十四五に成ります女  
の子を連れて手も足も士泥だらけ茶見世の前へ來ると……  
清兵衛さんの妻君さん茶でも飲んで行きなさるが好い……

大久保武蔵燈

女屋有難う御座い升ヨ、マア色々御世話にはかり成つて昨日は、  
有難ふ存じ升。蓋ナニ買つたのだから少しばかり持つて往  
つたのだ別を買つて遣つた譯じやア無へ。女屋マア清兵衛も  
喜んで御座い升子供達も多い中で能く氣を注げてお呉ん  
るのには和郎さんばかりだつて蓋然うかねア大切に爲るが  
好い直坊相變らづ精ぬ出したの……和郎さん今御聞なすた  
清兵衛さんのお内儀さんでお芳さんだ。ハアと立出でまし  
た又八大地へ手を突たなり又阿母さん誠に暫くで御座いま  
した芳マア和郎又八じやア無いか。又ハイ何んども御座い  
しやうも御座いません私も徒らに家出を爲た理由でも無く仔  
細御座いまして屋敷奉公をしたいと思いますと思ひ那方此方と渡つて歩  
々漸々結構を且那様の所へ御奉公をいたして居り升る内に色  
々の事情が御座いまして心には忘れる暇は無いと申すのも何



大久保武藏鑑

か申す間敷く伊座いすすが遠々知りながら御無沙汰をいたし居りまして此度は餘儀無き次第があつて御二方を御連れ申上げまして雷地へ参りましたやうな次第、只今茶見世の主人に阿父さんの御病氣の次第も承ばり總て存じて居りませす、只今迄安否も問はずに居りました段は御勘辨を下さいまし、芳ヤア和郎が達者で居たのが何寄り連合が毎度又八は何うしたか又八はと云ふて其話しをする度に妾も手紙でもあれば手紙に書いて迎ひにも遣るけれども……アノ和女覺へて居るかへ和女の兄いさんが歸つて来たんだヨ直兄さんでありましたか御懐しう存じ升又、お直大層大きく成つたお今鳥渡様子を聞いたが能くア孝行をして呉れる、私の居る跡は年も行かぬのに雪ぎ洗濯使ひ早間阿母と一緒になつて働いて呉れると聞いて大きに安心……と云つちやア済まねへが……

大久保武藏鑑

爺いさんや和郎も見忘れあすつたらう清兵衛の悴の又八は私だヨ爺ヤヤ、然ふで御座いましたか……先程は飛んだ事を口走つて尤も幼少い時分から伶俐者でね又今に成つて然んな事を云つたつて詮方が無へ、お母さん此所にお出でござるのは私が世話に成つた大恩のある奥様、今度色々理由があつて此方へ参り暫て阿父さんの所へ御厄介にならなければ……芳又八和郎が然ふやつてお世話にあつた方と云ふなれば何の様にも御世話がしたいが今も云ふ通り阿父さんが長の病氣で寝て居る所、又イエ長い事では御座いません切望少々の間此奥様をお世話申上げ殊に此若様に就きましては色々深い仔細が御座いまして別段に貴女には申上げませんが一と足先へ御歸んあすつて阿父さんに宜しう被仰つて下さいまし、芳夫やアノ連合の那の通りの佛性の清兵衛さん、然んな事はあらる



いなんて言ひあさる氣遣ひは無いから必ずお世話を……マヤ  
御挨拶もしないで御免下さいましよ、御覽の通りの田舎者で御  
座いましてモ一御挨拶の作法も存じませぬ位い……じやア又  
八や私には先へ歸つて清兵衛さんに話しをするから 又お直和  
女も先へ歸つて共々に話しをして 直ハ、イヤア兄さん妾も  
先へ戻りまして阿父さんに共々其話しをいたじませう……貴  
女切望入つしやいましよ妾が又何のやうにもどいたし升から  
と年齢は十四とは云ひあがらぬ直も其儘に爲て母と諸共に先  
へ歸つて清兵衛に其話しを爲るから清兵衛も夫れを聞いて是  
れ迄の間充分恩儀になつたる其人の御新造都合に由つてお出  
でにふつた云ふ恩儀は知つて居るから 清ア、一好いども  
能く御連れ申して呉れたぞ承諾を爲て御待受を爲て居ります  
る所へ御新造に甚十郎又八都合三人が參つていふせき詫住居

に家内六人、何分にも病氣の中で御坐い升暫く此所へ足を止め  
て居り升る其内に思ひ掛け無く若君甚十郎殿が痘瘡と云ふの  
で難瘡に御罷り遊ばして人參代に困る所から一度此渡邊角之  
進の妻君おふじ殿が京橋八官町の比丘尼長屋へ對して身を賣  
ります是れが一ツの手掛りに相成りまして同家の山中源内に  
面會をいたし升る一條から大久保彦左衛門お骨折に相成るの  
件り……

第十六席

先へ歸つて清兵衛に物語りを爲て置きましたる所へ御新造お  
ふじ殿同道を爲て参りまして扱て絶て久しき親子の對面、食し  
い中にも能く親子の情を知つて居りまして傍み見て居りまし  
たるおふじ殿も感心を爲る位い、就ては今度難儀ない理由で御  
厄介と云ふ尤も例の事は秘密で御坐いまして何んば親でも其



大久保武藏燈

話しはいたしませんが、只仔細あつて房州北條を立出でうっかり  
爲て居ると一命にも保はる事だに由つて御供を爲て來ました  
長い事では無いが二三ヶ月事の治まる間置て買ひたいと云ふ  
渣ア、一斯ふ云ふ不潔い狭い所で大事御坐いませんければ功  
望習く入しつて下さいますしとの挨拶におふじ殿も喜こんで  
ふじ迷惑ながら少々の間此所へ置て下さるやうに。と云ふので  
扱て是れから清兵衛の病氣の所へ厄介物が歸つて來て又八は  
貯への金子と云ふても澤山も御坐いませんから先づある内は  
其金子を以て万事の事を會計あつて置きました然ふ斯ふ爲る  
内に一月過經二ヶ月過經三月と云ふやうな事に相成り升ると  
其頭流行をいたしましたのが疱瘡で御座い升て只今でも此病  
が折々流行をいたして其が爲に死に至る者が數多御座います  
が當今と昔時とは大變養生法が違うと見へて三俵へ赤い御幣

大久保武藏燈

を立つて赤飯を載せて疱瘡神を送ると云ふやうな事はトント  
御座いません、モ一追々當節は開けて來て疱瘡でも虎列的でも  
何でも命を落さないで済むやうな事にありましたが鳥渡序で  
だからお話しをします今濱町に吉松文次と云ふ醫者あり升  
那の人の祖父さんに當ると云ふ事で御座います吉松周助と  
云ふ先生の疱瘡を下痢して取ると云ふ事を發明を爲たか人、文  
化文政の年間吉松周助先生と云ふたら大した者、疱瘡が非常に  
流行をして其か爲に命を斃すのか澤山あつて其時に男助先生  
考へたには、周疱瘡は元來熱から來るものであるからこれを  
下痢して取れないと云ふ事は無い。と云ふ所から種々の醫書を  
集めて色々考へたそう御座います段々考へて漸々の事で  
此藥と此藥を調合して斯ふ云ふ手當を爲れば必ず疱瘡で殺す  
氣支ひは無い第一顔や手足に痘痕を付ける氣支ひは無いと云



ふ極めは付けたが試して見なければなりません、然うかど云つて無暗ふ狗や猫を試した所で行かず、大抵の醫者だと他人を一ツやつて見るモン、間違つて殺した所がヒを持つて居れば下手人に取られる氣、支ひは無いと……然んなのに衝突九日にやア病人は災難で御座います、周助は無暗に自分を信用して掛る患者には盛らない、周誰か一ツ試して見度いものであると云つて居りました、スルと吉松先生二人子供があつて次男が六歳で御座いまして是れが瘡瘡に掛つた妻君、驚いて、妻貴郎大變で御座います、家の坊が瘡瘡で御座い升、周占めた、妻何か占めたんで、周何か占めたつて悉皆占めちまつた、乃公が診察をしてやろう、妻貴郎が診て下さらさきやア不可せん、周ヨシ、くど其所で兼て發明をした藥を飲まして色々手當をして見たが何うしたのか三日斗り経過と死んで仕舞つた、周ハ

アナ……藥が少し強過ぎたか知らん、妻貴郎マア飛んだ事をなさいましたねへ、亡くありました、周イヤ何うも詮方が無い、醫者だものたまよは人も殺す日、然ふ氣を落す事は無い……待て斯ふ云ふ調合にしたら今度は利くだらうモ、一人の伴が瘡瘡に取付かれて呉れれば好い、一人や二人は殺して見なければ好い發明は出来ないア、長男が瘡瘡に成つて呉れと思つて居ると又十日斗り経過ますと今度は總領の伴が瘡瘡手を拍つて悦んで、周占めく……妻君は彌々驚いて、妻彌々氣が違つた、其所で二度目に消へた藥を盛つて見ますと果せる哉瘡瘡を下して取れました、周助天へも登る心地してモウ充分是れば確かと云ふ所で是れを醫會に拵へて時の徳川の役人へ訴へて斯ふ云ふ事にすれば瘡瘡は下痢して取れると云ふ事を建言をしたが時の役人が用ひない、醫學館で段々協議いたした所が何



うも瘡瘡が下して取れる理由のもので無い、吉松周助は氣が遠  
つて斯んな事を建言をいたしたのであらうと今で云ふ其書面  
を却下して仕舞つた其時に周助は 周是れが行なはれぬ位  
の爲に難避する者が多いのを歎いて斯く發明いたしたものを  
ムザ／＼用ひないとは情け無い乃公はモ一 醫者はしあ  
とあつて名醫には違ひ御座いませぬ、吉松先生其時からヒタリ  
と醫者を止めぬぢまつた、醫者の道具と云ふのも如何で御座いま  
す、様々の機械から何も彼も昔んな賣つて仕舞つて金子のあ  
る間はブラリ／＼と遊んで居たんで、メスが妻君も驚いた、妻  
何うなさるんで御座います、周モ一乃公は醫者はしあ、妻  
じやア何とあさい升ので、周何をするか是れから考へるんだ  
吉松先生考へる事が好みと見へまして、ブラリ／＼と三十日斗

り遊んで居る内に考へた木で拵へた虎の形状の物を拵へて來  
ました虎と見れば虎何んだか犬の様うある、犬に爲ちやッ鼻が  
短かい、妻貴那何んですへ其物は、周是れか、是れは其張子の  
虎を拵へる、妻張子の虎……、周是れは張子下地で此所へ紙  
を張つて形を取つて仕舞つて首の處を別に爲て首の中へ土を  
入れて首だけを重くして糸でつないで首だけ動く、虎が首を振  
る形状だ、妻詰らないものを御拵へますつて……、周詰らな  
く無いから可笑い、吉松先生賣始める事賣れば、當今と違つて  
何うも弄物とは言條様々の弄ひ品のあり升る中で張子の虎が  
大景氣、那れを傍に置くと思ひ病が流行らぬいと怪からんこと  
を言觸らして張子の虎屋の繁昌、吉松周助先生は山伏井戸の傍  
に居たさうで御座い升、只今の日本橋警察署の後の所です、此頃  
は張子の虎屋に成つて下職が五十人も居てト、拵へる妻



大久保武藏鑑

君も周助先生も大變に悦んで、周醫者で發明を爲たか用られ  
なつたが張子の虎と宜い塩梅に往つた。と大層是れでお金を  
儲けました。然ふ斯ふする内に又何か感したものと見へて道  
具も何も賣つて仕舞つてヒヨリと虎屋を止めた。妻貴郎何う  
なすつたので……周イヤア折云ふ手遊品を拵へて居たつて  
不可ん何か外の事を考へる。妻今度は何んです。周何んだか  
知らんが未だ考へが付かんと。ノラノラ遊んでゐる如何程か  
子を儲けても遊んで居ちやア堪らぬ。再ひ資産を失つて仕  
舞まして何う爲やうと云ふ時に徳川の文恭院様であらうと考  
へ升か其共其後の上様でありましたか御不例で御座います  
然る所が其御病氣と云ふのが中々分り兼ねる。典樂頭も殆んど  
弱つて兎に角上様の御病氣、病氣が何んだか分らんじやア詮方  
が無い何うしても病名を立てなければ成らんから替る。御

大久保武藏鑑

脈を伺つたが何分にも何んど云ふ病だか知れない、今はそんな  
ことば無いが昔時の事、未だ充分に醫術の開けな、時分で御座  
い升から何うも不可ない病名が分らぬ、其所で江戸中の醫者  
を招へて淺草の本願寺で御座いまして恐れながら上の御病名  
の事に就て討論をすることに成つて其時に吉松先生強て辞退  
をするのを或人が無理に案内をいたして其時に吉松周助と云  
ふ人は其所へ出まして申入れましたには、國何うも影事をし  
て居ても詮方がない上の御脈を引て病名を立てやうと云ふ事  
に成つて御侍醫方もありません、直接に將軍家の御手を取  
られたけの資格が無い、直接に將軍家の御手を取らば出来んか  
ら糸脈と申しまして將軍家の御手に糸を持たしてお次の間に  
扣へて其糸を引て脈を伺つて吉松先生自ら藥を劑つて是れを  
差上げた所が御全快遊ばした、遂々吉松先生其が爲に御扶持を



大久保武藏鑑

頂戴して此人も矢張り法印に御進みなされたる位、餘事を申  
上げて恐れ入り升が吉松ゑんてへ人は抱瘡を下して取る事を  
發明いたしました、案下休題又八の弟金松と云へる者が抱瘡に  
相成つた、一ツ家にあつては何うしても感じ升るものと見へて  
甚十郎殿へ是れが傳染りました、所が抱瘡もく松皮と稱へて  
るので極く悪い性質と見へて目の險は臆上つて向ふは少しも  
見へないやうな工合、驚いたのはおふじで御座い升、甚十郎殿に  
万が一の事あつては大變、良人の意思を次ぐ事が出来な何  
うしたものであらうと思ひまして神佛を祈り又八に於ても水  
を浴び拭いたして神佛を祈つて居りましたが中々神や佛を祈  
りまする位いで是れが全治いたす病では御座いません、早速に  
品川の宿に住居いたす町、醫山下正庵を招きまして正庵直ぐ來  
て呉れて此様子を見たが正なかく是れは難症全で鼻も何

大久保武藏鑑

にも思は出ない位、斯ふ云ふのは色々醫者の方で療治のし  
方も御座い升る者なれども一通りの抱瘡では御座いませんか  
ら恐らく人參を用ひなければ逆も王の緒を繼續める理由には  
不可ん、人參と云ふ物は高金の物にして少々位用ひた分には  
利かさい人參代二十兩なければ成らん、其人參を求めたなれ  
ば早速に手當をして進げせうと正庵は歸つて仕舞う跡へ裂  
りましたる又八とおふじの二人は清兵衛には話しも成らづ  
ふじ又八家の事が出来ました、又何うも御新造様大變る事が  
出来ました、私共が田地山林を持つて居る百姓から二十や三十  
の金子は何うでも成り升れども御覽の通りのしがあゝ生活  
今の所で二十兩と申せば大金で御座い升、借借をしやうと云ふ  
所は無し私は御新造様が何んで斯んるは御苦勞を遊ばすかと  
思うと慘痛う御座い升、ふじ、イエ妻は固より旦那の遺志を次



大久保武藏鑑

て事をしやうと思ふのだから苦勞困難は固より覺悟一期半期の奉公人の其方まで共々心配を掛けると云ふは氣の毒千萬又イ、エ夫れは骨を碎いて御奉公をしたからと云つて主従の縁は深いもの決して其心酌には及びません ふじ就ては二十兩と云ふ大金が要つて見ればミスル 甚十郎様の御大事を目の前に扣へて居ながら見殺しにしなければ成らんア、此りやア何うしたものでありませう。と甚十郎様の御介抱をいたして思案に暮れて二人は居り升る夕暮方門口を通る若い者と見へて二三人 甲何うだい 過日主は何かい 品川へ往つて遊んで来たかい 乙ナニ品川へなんぞ行くものか 甲嘘言を吐け不知ア切つたつて無益だぞ 乙なせ 甲なぜつて主は二日斗り家を知り明けて遊んで来たつて云ふじやア無へか 乙ウム遊んだには遊んだけれども品川じやア無へ八官町の比丘尼長屋だ 甲

大久保武藏鑑

妙を所へ飛込んだおア 乙比丘尼と云ふからは抹香臭へ女かと思つて往つて見ると然ふで無へ餘まり若へのは居ねへ廿二三から三十位へ迄の女が揃つて居て皆んな好い器量だせ、夫りやア面白いいぜ 甲ウム…… 兎も角比丘尼長屋と云ふから比丘尼なんだらう 乙然ふヨ、だから品が好いや、品川の飯盛を買つたつて如何程か錢が入る、向ふは勘定が安くつて誠に客の扱ひが好くつてモ、何うも遊びに行くんなら八官町だの、甲乃公ア話しには聞いて居るけれども未だ行かねへ、今度汝行く時に一所に連れてつて呉れる 乙ア、好いとも、是非一遍行つて見なせへ話しの種み成るのら…… ふじ又八く 又へエ ふじ其八官町の比丘尼長屋てへのは何んだい 又然ん事事は貴女方の御遊ばす事では御座いません、京橋八官町に比丘尼長屋と云ふのが御座い升夫はまア所謂飯盛女郎や何か



大久保武藏鑑

も出来ず年輪を如何程か取つて居ります者が集まつて居り  
升る實に話した成りません私は一度も買に往つたことは御  
座いませぬが前を通つて様子を見ました廿四五位いから三  
十位い迄の者が皆んな見世を張つて居ります又普通の遊女屋  
とは違つて様子が變つて居り升るから遊びに参りまする者もあ  
るやうで御座い升然し世の中は様々で御座い升 ふじ又八モ  
一私も今年は廿七才妻き川竹の勤めが出来位いある遊より  
其志しもあつて妻の身は替へ何云ふ事に成らうとも若殿甚  
十様の御養育をして矢代の家を無事に御相續をなさせ申した  
い、妻の様な不綴標の者でも先方へ参つて話しをしたら人參代  
の二十兩位の事には成らうかと思ふ切望妻を今話した比丘  
居長屋へ隠れて往つて身を賣つては……又下何うして……  
夫りやア不可ませぬ御新造様旦那様の位牌に對して貴女様に

大久保武藏鑑

然んを事をかさせ申しては此又八が相濟みませぬ ふじ濟ま  
ん事はあるまい、又八、何れ和郎の爲に身を賣ると言ふ次第では  
無い且那樣が心を殘して御果かされた甚十郎様を御育て申上  
げやうと云ふ心、モン甚十郎様に万々ケ一の事があつては成り  
ませぬから私も好んで身を賣りたくは無いが何うも今耻や外  
聞云つて居る場合で無いから若殿の爲、家の爲賣れる事から  
此身を賣つては呉れまいかと云はれた時に鎌田又八は差俯向  
て居りましたが思はず胸も一杯に成りまして 又ア、一時と  
は云へ運とは云へ房州の北條で矢代越中之守の伊國家老、城代  
迄御勤め遊ばした方の奥様が三十と云ふ年を向ふに見ながら  
一夜の内に源平藤橘四姓の人に枕を替す勤めとしても若様の  
御身の上を御大切御病氣御全快を祈ると云ふは實に恐れ入り  
ました……斯ふ申上げては失禮ではあり升が御綴標が好く入



大久保武蔵鑑

つしやい升から年は廿七でも御見上げ申した所では廿二三  
にひつきやア見へません然ふ御覺悟をなさいましたものなれ  
ば此病瘡と云ふものは日敷のあり升るもの日限が遅れまして  
甚十郎様に万一の事が御座いましては悔て返りぬ事で御座い  
升から早速ながら口を探して参りませうと爰で鎌田又八はか  
ぶじと相談の上で御座いまして江戸八官町へ出て参りました  
が扱て比丘尼を一人抱へないかと一軒く聞いて歩く理由に  
も成りません近所の者に噂を聞くと比丘尼長家十二軒御座い  
升る内で先づ其中でも花菱屋長兵衛と云ふのが大變義侠心に  
富んで居ると云ふから此家へ参つて話しをしたら分らん事も  
あるまいと花菱屋へ参りまして仔細の話しは出来まいが人益  
代に差支へて云々斯云ふ譯と云ふと當人が切望見たいと云ふ  
から其所で中へも置いてお見せ申した所が前申上げましたる通

大久保武蔵鑑

り標緞が好う御座いますから廿七でも見た所が漸う廿三四位  
ひにひつきやア見へない是れなれば仔細は無いと云ふので御  
座いまして直ぐに三十兩と云ふ直が極りましたが只今で云つ  
たら百兩と云ふ金子にも成りませうか其頃をいの三十兩と云  
ふのは大金で御座い升約束が済んで三十兩の金子を受取りま  
して人參代に二十兩を拂ひ餘れる金子は又八父の病氣の方へ  
宛てましたる事で昨日までは御新造と云われた方が今日改め  
て淫を齎ぐ賤しき家業彌々見世へ出ると云ふ事に成つたが今  
日來て今日からと云ふ理由には不可ん商賈の都合を見やうと  
云ふので十四五日の間は見習ひ扱て然ふ何時迄も遊ばして置  
く理由にも参りませんから其所で名前を妙歌と付けまして突  
出しと云ふ事に成りました然る所が其日に至りまして天下の  
旗本は其時分は氣の流い頭でありまして金松又四郎の所へ定



大久保武藏鑑

二百二十  
會があつて其會の歸り掛け八官町の比丘尼長屋へ通入つて來たる山中源内、思ひ掛け無く爰に出會を遂げまして一ツの手掛りを得まするの一條は次席に委しく申上げます……

第十七席

主人の若君の爲に身を比丘尼に相成り、其身を賣つて甚十郎の庖厨に付人參代に宛てる云ふのは實に忠女ども節女ども申し升る角之進の妻女で御座い升るが爰に其頭をひ天下の旗本の勢ひと申し升る者は又別段前にも述べました通り大名と云ふ者は昔から不實で豊臣が繁昌をすれば豊臣に附屬をする徳川の御代に成れば徳川の下へ付て居ると云ふ去れば大名は實に不實極まつた次第で夫れから見ると山中源内を始め凡ての旗本は徳川家三州岡崎の頭をいから共に働き、千辛万苦の末徳川家を起して御旗本で奉公をして居る徳川公が斃れれば

大久保武藏鑑

共に倒れやうと云ふ所謂生死存亡と共にいたす旗本衆、夫れでけすから良々もする大名を相手にして喧嘩をいたしましたり大名の方でも旗本と來ると恐れて一步譲つて居り升る、其管でげす、小身で居ながら仙台の政宗の頭を金松又四郎が打つた杯と云ふ事があり、升身の程を忘れて随分事をいたし、升大名を相手に旗本が口論をいたす頭をいで去れば其旗本の内でも種々の當派が立つて居て四谷六方白柄組又は金銀の入齒成は將軍の尻押組おんてへのがありまして、此旗本が月の内に兩三回宛運試しの會或は暑中寒中の真似をしたり、寒中暑氣の真似をしたり、是れ皆戰さの時の心掛けで寒い時分に暖たかくして居たり、暑中に涼しいやうな事をして泰平に慣れてはソレ鎌倉と云ふ時に身体か生に成つて居て其役も立ん杯と云ふ所あら雪降る中に帷子を着て集つて障子厨紙をトッ拂つて庭の雪を眺



大久保武藏鑑

めふから扇使をして 甲「ア、暑い事では御坐らんか。杯と云ふ  
又「カン」火を起して顔を扇し 乙「何うも御寒い事では御坐らん  
か。杯と云つて居る白痴々々しい様だか其時分は是れが流行つ  
たので其頃築地の正覺寺橋と云ふ所に屋敷がありましたる金  
松又四郎今日は月番で御座い升から運試しの會かあると云ふ  
ので其所に集まりました其所へ集つたる旗本兼水野十郎左衛  
門池田勘兵衛白旗三左衛門近藤登之助山中原内を始めとして  
以上廿八人運試しの會と云ふのは何う云ふ理由だと云ふと廣  
い座敷が出来て居り升其廣い座敷の中央に鐵砲を車臺に仕掛  
けて置きましてセン「イ仕掛けに成つて居て尤も砲丸が込め  
てあるが紙詰めでありまして具足を御取寄せに相成りまして  
此具足を着て其鐵砲の廻りを車臺に一同扣へて居る御亭主が

大久保武藏鑑

其所に出まして 亭宜しいか。と云ふ聲が掛ると 乙「宜し  
いと云ふ聲と共に車仕掛けの綱を曳くと全で獨樂の様にグル  
／＼と廻つて居てドンと發します其丸が其所に並んで居る何  
人かに打付かる紙玉でげすから命に障るやうなものはありませ  
んか煙硝の煙りがパツと立つて其丸の當つた人が大層に悦ぶ  
甲「某が今日は當つた實に御運強いと云ふ所から祝す鐵砲の  
玉の衝突つて悦んで居るのは此人達ばかり夫れで御催しなさ  
るので相變らず強い事の話しばかりであり升今日も大勢集つ  
て御亭主の又四郎が 又「好いか 乙「宜しいと云ふから繩を引  
くとドンと發砲いたしました…… 又「誰方ですか御當りは……  
甲「近藤登之助 又「イヤ何うも近藤貴公察いせ前回にも貴公が  
當つたつた 登「前回にも拙者だ、ヤア」 結「構だ此分じやア未  
だ」 拙者も當分は運が好い。ナニ好いものか眞實の取柄なら



大久保武藏鑑

二百二十四  
二度死んで居るんだ、扱て其儘にして具足を脱ぎましたる事に  
て其跡に於て亂酒と云ふ事に成りましたか其強い事酒一升肉  
十斤各々酒か廻つて参り升ると此所に於て大きな酔をして話  
ひを話ひ然るかと思ふて、舞の舞をして果卵くつて傍に居らな  
い様な人もあります、又中には金松の所の女中とからかう迷  
或なのは女中達でキヤ、夕景に相成りまして爰でお開きと云ふ事  
やつて居る内、あモ、夕景に相成りまして爰でお開きと云ふ事  
に成りまして立出でましたる人々は、大抵家來は一人も連れて  
居りません、平常籠駕に乗つて歩くやうな者も此會には歩いて  
來る身分があつて馬へ乗つて來へさ人も徒歩で來るのか今日  
の自慢の様に成つて居り升、甲、歸るか、乙、歸るか、甲、同道  
爲やうと別れ、く、に成る中に山中源内、近藤登之助、池田勘兵衛  
三人、ブラ、く、と話しあがら、築地を出ましたが、登ア、一酔

大久保武藏鑑

つた、源、近藤、登、エ、源、運、試、し、の、會、に、先、月、今、月、と、兩、度、迄、當  
ることとは、貴公、餘程、運、か、宜、い、お、ア、登、イ、ヤ、何、う、も、此、塩、梅、で、は  
又、來、月、も、打、付、か、る、か、な、二、度、あ、る、事、ハ、三、度、あ、る、と、云、か、ら、勘、山  
中、今、日、の、大、層、飲、み、な、す、つ、た、お、ア、源、イ、ヤ、何、う、も、勘、め、ら、れ、て、弱  
つ、た、實、に、何、う、も、酒、は、悪、く、餘、り、勤、め、ら、れ、る、と、心、持、の、悪、い、も、の  
で、人、の、惡、ひ、奴、が、あ、つ、て、飲、め、お、け、り、や、ア、降、參、を、し、る、と、斯、ふ、云、ふ  
だ、ん、何、ん、で、あ、ら、う、と、も、旗、本、た、る、へ、さ、者、か、降、參、を、す、る、筈、は、無、い  
如、何、に、も、殘、念、で、あ、る、が、ら、其、處、で、無、理、酒、を、煽、つ、た、先、づ、今、日、の、内  
で、大、酒、で、勝、ち、を、右、め、た、の、は、恐、ら、く、拙、者、か、あ、然、し、今、迄、は、氣、が、張  
つ、て、居、た、か、ら、別、々、何、ん、と、も、無、か、つ、た、お、表、へ、出、た、ら、大、分、酔、が、廻  
つ、て、來、た、と、話、し、を、し、あ、が、ら、フ、ラ、リ、く、と、夜、風、に、吹、か、れ、一、歩、は  
高、く、一、歩、は、底、く、踏、々、限、々、と、し、て、三、人、ア、一、好、い、心、持、ち、だ、と  
恰、好、八、官、町、の、大、通、り、迄、參、り、升、と、ア、く、く、く、往、來、の、人、が、群



大久保武藏鑑

集をして居り升様子 源何んたい此りやア…… 登八官町の  
比丘尼長屋だ 源ハナナ比丘尼長屋…… 兼て話には聞いて  
居るが未だ通つた事が無い、一ツ通り抜けて見やアか 勘宜か  
らう又比丘尼共が大勢見世を張つて居る所は別段だ参らう  
ろう 登参らうだが池田何うも此白柄が見へると先方の奴が  
驚いて不可ん柄を隠して行こう 源底程豪い所へ氣が注いた  
も四谷の白柄が来たなんてへど大勢に目立つて不可んに然し  
何う隠すんだい 登其手拭を柄へ巻て羽織で隠すんだ 源ウ  
ム一中々六ヶ敷いもんだなア、貴公毎度来るお 登元談言つち  
やア不可ない 源ウムト成程隠せた、ア出掛けやう。酒は  
氣遣水とは能う申しましたもので酔つて居るければ然ふ云ふ  
所へ天下の旗本が還入るべきじやア無へが大勢を爲て居り升  
から三人アロ、 遣入つて参りました比丘尼長家と申すは八

大久保武藏鑑

官町お昔時ありました、各々其見世を張つて居り升のみ只今で  
は切り見世あんでへのは御座いませんけれども随分不潔も  
ので御座い升、勿論ア、云ふ所へ行けば惣体不潔には違ひあり  
ませんが隣りから隣りへコト並んで居ります其煩なる事  
は實に大したものので素見客がツイ、と云つて居る、今三人の  
旗本衆一杯機嫌で見物しながら通り抜ける、山中源内大變に酔  
つて居り升からヒコロ、と跪め、足を踏締め、参り  
升ると恰好長屋を遣入りました七軒目の家で屋敷を花菱兵  
衛と云ふ家の見世耻かしそうに頭を下げて居り升る一人の比  
丘比丘と一概に云ふから、全で毛一本も無く眞實の坊主であ  
らうと思召す方もありませうが無毛ばかりでは御座いません  
頭巾を斯ふ戴いて居り升る中には毛の生て居るものもあるけ  
れども夫れが法で御座い升、又中には腰法衣杯を着けて居る者



大久保武藏

もあつた其内其差俯向て居る婦人を通り廻りながらヨロリと見だす往來の者が悪口を往たり何かして居るのを耻らいて居る様子を年齢の頭二十三四にも見へませうか實に盛りは少し過ぎたりと雖も殘れる色香其移り香の何と無く床敷き様子源内思はずブルと身を震はし源ア、一好い婦人だ此所等逸りに置くべき様な婦人で無い切望して一過買つて見たいものだア、好い女だと思はず立留つて茫然として居るのを然んおことは知らぬいから近藤池田の二人が池田ヲイ山中源イヤ何うも勘何を狂然して居るんだ源ナニ餘まり素見が色んな事を云つて面白から立つて見て居るんだ池然ふかサア早く行うと八官町に出ました人が人の心は何時何う變るか分らぬいもので八官町を通り越すと源ア、痛い源何ア、痛い源何うしたんだ山中何うかしたか源何

大久保武藏

うも此りヤアト……飛んだ事をした平素に無く飲過ぎた見へて俄かに胸先が痛んで来たア、一痛い登痛いじやア無い夫りやア困つたもんだなア如何ある家傑でも病氣の爲には詮方が無いが飲過ぎから起つたのか源ウム飲過ぎたらうと思う登瘧飲だらう源其溜飲……溜飲が差込んで不可ん登溜飲で差込むてへのは不思議だなア何うしたんだ源何うしたか知らぬいが無暗に痛い登歩けぬいか源誠に向うも一ト足も歩く事は出来ない病氣を乗て先へ歸る次第は不可んりやア不可ない朋友の病氣を乗て先へ歸る次第は不可ん源イヤげれども拙者は跡からユル……参るに由つて一ト足御先へ願ひたい跡からプラ……参るから勘夫じやア斯ふしやう我々共兩人で駕籠を雇つて参るから其れへ乗つて行き玉ひ源イヤ……決して御構ひ無く……勘何も然ふ吾々を遠ざける



大久保武藏鑑

には及ばんでは無いか 源次で遠ざける次第では無いが 勘  
へ如何に強情を張らうとも一ト足も歩けない者が是れから  
牛込の屋敷へ参ると云ふのは大變だ、平素と違つて拙者は今日  
は餘り酔はんから駕籠へ尾て同進する 源同進するには及ば  
ん切望御遠慮無く御引取り下さい……ア、痛い、登池  
田何を願つて見て居るんだ 勘今駕籠屋を見て居るんだ、傍  
伴向ふに駕籠屋があるから…… 那所へ往つて駕籠を雇つてや  
らうと其へ飛込んで 登是れヨ 男入つしやいまし。見ると  
白柄組で御座いますから何れ旗本に相違無いと思つて其時分  
白柄組と云つちやアバツくです 登駕籠を一挺拾へて呉れ  
ヨ、別は病人と云ふのじちやア無いが飲過ぎだから其積りて切  
望牛込まで 男畏まりました。早速に仕度をした、近藤登之助深  
切の人で御座り升から源内の手を取つて 登サ山中是れへ乗

大久保武藏鑑

つて行かつしやい 源色々御心配を掛けて相濟まん 登夫れ  
からお駕籠屋牛込のチャント屋敷まで届げんげれば不可ん  
駕籠へエ宜しう御座い升 登屋敷の名は…… 源イヤ屋敷の  
名は私オチャント敷へるから宜しい、一々其所で云ふに及ばん  
から……何うも此兩君に對して甚だ恐れ入つたが然らば此所  
で御別れ致す 登イヤ大切に爲るが好いと兩人の侍は其儘に  
往つて仕舞つた駕籠屋も牛込まで行く積りでガスから昇き掛  
げてヤンく一丁ヨリ來ると 源待て、駕籠屋待て、鳥  
渡其所へ下して呉れ 身エ、御胸でも痛いんですかへ旦那……  
……其共小便でもなさい升か 方何を爲るんでも無いが下し  
て呉れ何かお兩人の侍は何方へ往つた 乙向ふい御出でおさ  
いました 源然ふかモ、此所で好い、 甲「エー……モ、  
好いんですか 源直つた 甲「大層速く直りましたな 源イヤ



大久保武藏鑑

何うも奇体の病で私の病気が胸が痛く成るは薬を飲むより何  
と爲るより駕籠へ乗ると直きに直るんだ 甲「そんな病ありや  
ア爲ません 源「イヤ少し見があるから下して呉れど紙入れ  
を取出したした小判一枚を出だし 源「是れを遣かすから如何程  
だか知れんけれども取つて置け 甲「ヘエー此やア何うも  
ヲイ合緒一兩御呉れおすつた 乙「何うも且那有難ふおせへま  
す 源「然し今の二人は中々念が届いて居るから明日にでも来  
て何所迄届けたと斯ふ聞いたら牛込蕎麦店まで参つた 蕎麦店の屋  
敷の門の所で下しましたと斯ふ云へ眞實に云はれると不都合  
だから…… 甲「ヘエー……じやア那方は友達に嘘言を吐て返  
して御一人で今晚御遊ひに入つしやるんで 乙「八官町でござ  
るぞ 源「大きにお世話だヨ 駕籠家の癖に…… 爲ると打た切  
るぞ 甲「無暗に切られて堪るもんじやア御座いませぬ 駕籠屋

大久保武藏鑑

は牛込まで行く所を一丁か一丁半で一兩貫つたのでケスから  
斯んな嬉しい事は無い源内は衣類の袖で白柄を悉皆隠しまし  
て通りへ目を配りながら然ふでもない二人が尾けて来やア爲  
まいかと……二人は全く加減が悪いのだと思ひ駕籠へ覗せて  
返したのでケスから尾けて来る様子も無い小戻りを爲て八官  
町比丘尼長家七軒目の家へ飛込んだ驚いたのは家の者突然二  
階へトーンと上つて 源「ア、一疲勞れたと胸を叩いて  
居る女中が一人出て参りまして 女「入つしやいまし 源「見世  
に居る何を鳥渡出して呉れ 女「何の御方で御座い升か……御  
馴染様で…… 源「イヤ馴染も何もありませんやア爲あいまが初會  
だ来た見世に居るやうだ 女「妙哉さんで御座い升か 源「羊羹  
や饅頭を出されたつて詮方が無い私は酒飲みだから 女「イエ  
妙哉さんと云ふ御座い人で…… 源「妙哉だか何んだか知らんけ



大久保武藏鑑

れども廿三四に相成る何か……コノ優雅かの女ハイ彼の  
方は今日見世へ出ましたので未だ御客様と云ふたら旦那様がいの一  
番で御座います。源然ふか夫りやア、じやアして見ると口  
明けたあ、是れは何うも幸ひの事があるもんだ、酒肴の仕度をし  
て……女承知いたしました。源早速其何を呼んで呉れ一杯  
酌をさせるから。女ハイ……と云つて女中は下へ降りて参り  
ました。暫く経過すると女に連れられまして其所へ参りまし  
たのは渡邊角之進の後家即ち當時比丘尼の妙歌、眞ッ赤に相成  
りまして何と無く其座敷へ足を入れまするのも層所の羊に  
らねども一と足宛死に近付くやうな心持、百姓町人とは事違ひ  
まして御武家の事で御座い升から耻かしながら其所へ参つて  
恭しく兩手を突へました。ありで頭を下びまして。妙能う御

大久保武藏鑑

出で下さいまして御座り升ると云ふ口上さへも口の裡大きな  
聲で出る様子も御座いませぬ。源ア、何か其方は妙歌と申  
すか。只今此所に居た女子から承知いたしました。今日から見世へ出  
ると申すか。拙者共斯様な處へ参るべき身分では無いが只今朋  
友等と一杯喫じて鳥渡通り掛つて其方の姿を見て夫れから朋  
友を迷て此所へ来た位、暫時酒の相手をさせやうと心得て参  
つた。此方へ進め。妙ハイ恐れ入りまして御座い升、斯様な  
所へ御道入り遊ばす御身分で無い事は拙女も存じ居りまして  
御座い升、切望御羽織を御脱り遊ばして。源ウム好しく。羽織  
も取る。妙御袴も御取り遊ばして。源取るヨ。大小を片傍  
の所へ置て袴を其所へ取り捨てましたのを妙歌が手に取つて  
強んで居る様子。源内よく見ると中々袴杯を疊むのは物  
馴れたもの。源ア、中々其方は感心だ。ア羽織杯を着て居る



大久保武藏鑑

と却つて不可ん。と脱棄てましたる羽織を其儘に其所へ取上り  
ましたる彼の妙歌が其羽織の紋所を暫く不審顔に打眺めて居  
りました。が妙失禮な事を伺ひ升るが源、クム、妙此御羽織  
は旦那様の御定紋で御座いますか。源、ア、身共の定紋、妙  
御珍らしい御紋所で御座います。丁子車の中に巴の付て居り升  
る。滅多に御座いませぬ御紋で……源、妙、所へ目が注いたな  
ア、丁子車に巴の紋、成程然ふ云へば澤山は無いな。妙、旦那様は  
万、一山中様とは仰せらるはしませぬか。源、ナニ……拙者の姓  
は如何にも山中と申すが貴公何うも一口に比丘尼杯とは云  
へんもので紋所を見て山中と云ふ姓を知る杯と云ふ者は感心  
な事だを、何うして左様な細かい事を存じて居る。妙、万、一途ひ  
ましたらば御詫を仕り升が左様なら旦那様は天下の御旗本山  
中源内様とは仰せられませぬか。元、甲州から出ました武田の一

大久保武藏鑑

族でございませぬが山中源太左衛門様御血統では御出で遊ばし  
ませぬか。源、此りやア恐れ入つた何うもか、妙歌察いや  
如何にも山中源太左衛門あり出でたる家、甲州寺にして先祖は  
武田の一族だ。夫れを聞くと涙を流した彼の妙歌が、妙、恐れ入  
りました事でありませぬが山中様と云ふ事を伺つては壁へ一夜  
の御情でも此場に至り御酒の御相手さへも致し升る事は相成  
りませぬ。切望御暇を下し置かれるやう御免遊ばして下され。と  
涙を流して立出でやうとするから裾を捕へて。源、コレ、知  
れての上は詮方が無い如何にも天下の旗本山中源内に相違無  
いが山中源内では酒の相手が出来んと云ふは如何したもの。夫  
共拙者は嫌である。と申すのか。妙、身の薄命から此汚らひさ  
地へ落ちましたる以上は男を撰り好む杯と云ふ事、決て御坐  
いませぬ如何なるお方と雖も敷ならぬ妻の爲に御出で遊ばし



て下さるかと思へば其嬉しさは如何哉り左は去りあがら愛に  
貴郎様の御相手が出来ぬと云ふは斯く相成りました以上は決  
て偽りは申上げませんが貴郎と拙女とは同家で御座い升るア  
ッ……と云うに泣伏しました源十=拙者の同家……ウム  
拙者の同家と申する者は天下の内に只一家しら無い房州北條  
の矢代越中守の即ち家老を爲して居る渡邊角之進と云ふ者で  
ある去れば山中渡邊は同家なり互ひに矢代安齋守の手許にあ  
つて共に甲斐の國ある時は一方の大將分たり然れども勝頼  
は徳川家に豫め附屬を爲す其時山中渡邊の兩家も主君安齋守  
も従つて徳川家の臣と成り以來渡邊氏は矢代家の城代家老拙  
某の叔父に當る事を承知いたして居る夫れより外に山中に

同家と云ふべき家は無しテ委しく吾身の上を存じて居る其  
方は……と云はれたる時に暫くは涙に潤んで居りましたが  
妙左様御承知が御座いますれば一通り御物語りをいたし升。と  
愛で身の上の御物語り矢代越中守の義理ある弟重三郎今日石  
見守と相成つて居る者兄嫁光月院と密會をいたして居る所の  
次第から角之進が暗殺の一條甚十郎君が瘡瘡の爲に其身を比  
丘尼に産つたと云ふ最と憐れある御物語りを此所でいたす源  
内愛に心願へしましたる者と見へて遙かに退つて兩手を突へ  
必ず渡邊家の爲に一臂を盡すと云ふ事を誓ひ其翌日當時族本  
肝煎大久保彦左衛門に此事を申入れる彦左衛門石見光月院の  
不義を怒つて一ツの大騒動を起すと云ふ益々佳境に入る所は  
第三卷のお楽しみ……

大久保武藏鑑 卷の二終



明治卅年五月七日印刷  
全年全月十五日發行

東京市淺草公園第六區百四  
燕林事

講演者 蘆野萬吉

發行者 同 神田區佐久間町三丁目卅八番地  
市川路周

印刷者 同 神田區柳原河岸十四號地  
大場沃美

發行所 同 神田區佐久間町三丁目卅八番地  
文事堂





